

# ローゼ・クラン台本\_Story1

---

白百合の髪飾

## 収録形式

フォルダ名 : rc\_01\_キャラクター名

ファイル名 : 台詞番号\_01

収録形式 : 44100hz 16bit モノラル wav

## 台詞数

◆総台詞数 : 296

◆内訳

オルトヴィーン : 46

アンネローゼ : 106

ヴェルディアナ : 77

ラフ : 67

番号	キャラ名	台詞	ト書き
<b>Scene1</b>			
朝、小鳥の声がする。 そんな中をやって来る一台の高級車。 車は薔薇の咲き誇る屋敷の前で止まり、中から一人の少女が出てくる……			
001	ラフ	お待ちしておりました、ヴェルディアナ王女様…	車から降りてきた少女を迎える
002	ヴェルディアナ	……やめて	ラフの前で立ち止まる
003	ヴェルディアナ	ここでは、私は「ルディア」。 ただの村娘のルディアになるのです。 ……決して「王女様」などと呼ばないように。	
004	ラフ	……大変失礼いたしました、ルディアさま	
005	ヴェルディアナ	あなた、名前は？	
006	ラフ	ラフと申します。 この別荘の、庭師をしております。	
007	ヴェルディアナ	そう。 これからしばらくの間、よろしくね、ラフ	去っていく
008	ラフ	ヴェルディアナ・スカラティーナ。 それが彼女の本名。 その正体は、とある国の第一王女。 彼女がここを訪れたのは、「病気の療養」……という名目。 おおよそ、ただ王女として生きることに疲れたのであろう、と、彼女がここへ来ることを告げに来た背の高い召使が耳打ちしてきた。 どんな理由でここを訪れようと、それは別に僕には関係のないことである。 僕はただ、この庭を美しく整えるだけ。それが僕の仕事。 だから、彼女は好きに生活すればよい。 ……そう、思っていた。	語り
009	ヴェルディアナ	『ローゼ・クラン-永久（とわ）の薔薇たち-』 ストーリー1（ワン） 「白百合の髪飾（バレッタ）」	タイトルコール
<b>Scene2</b>			
010	アンネローゼ	兄さま、兄さま～	部屋の扉をノックし、開ける
011	オルトヴィーン	なんだい、アンネ……	覗き込んでいたベッドから顔をあげる
012	アンネローゼ	とっても退屈なの 遊んでくださらない？	オルトヴィーンに抱き付きながら
013	オルトヴィーン	……アンネ、何度も言っているように、僕は彼の目覚めを待っていないといけないんだ。 だから君とはしばらく遊べない。 分かってくれ。	優しく諭す
014	アンネローゼ	……兄さまは最近、その子のことばかりだわ。 つまんない。	拗ねている

番号	キャラ名	台詞	ト書き
015	オルトヴィーン	彼が目覚めるか否かは、とても大切なことなんだよ、アンネ	
016	アンネローゼ	ええ、そうね 分かっているわ。 兄さまが、私よりもその子のことが好きで、大事だってこと！ もういいわ。兄さまなんて知〜らない	オルトヴィーンから身を離し、 部屋から去っていく
017	オルトヴィーン	あ、アンネ……	呼び止めるもアンネは止まらない
018	オルトヴィーン	ふう…… 我儘姫のご機嫌をとるのは大変だ。 でも、仕方がないことなんだ…… もう彼は三日も目を覚まさない……一体なぜだ？ 僕はちゃんと、彼が僕たちの仲間になるに足る……いや、余りあるほどの血を、確かにあげたのに	ベッドに目を戻す
019	オルトヴィーン	早く目覚めてくれ、僕の愛しい薔薇……	ベッドに眠る人物の頬を撫でる。

## Scene3

020	ラフ	毎日毎日、ヴェルディアナ……いや、ルディア様は庭にやってきては、ぼんやりと庭に咲く薔薇たちを眺めていた。 この庭を埋め尽くす薔薇たちの中にあっても、ルディア様はその高貴さを失うことはなかった。 常に凜と胸を張り、背筋を伸ばし。 村娘の服装をしていても、その漂う上品さ、気高さを決して隠すことはできない。 ……そうあるように、幼い頃から求められていたのだろう。 それは、疲れても仕方がない。 儂は彼女にとっても同情的な感情を抱いていた。	語り
021	ヴェルディアナ	……ラフ。 ここの薔薇は見事ね	ぽつりと
022	ラフ	ありがとうございます	
023	ヴェルディアナ	滅多に遊びに来ない別荘だけれど……毎日手入れをしてくれているの？	
024	ラフ	はい。 それが仕事です。	
025	ヴェルディアナ	そう……あなたは仕事熱心で真面目なのね。 とても良いことだわ……	自嘲気味に（王女という責務から逃げ出してきた 自分を心の内で責めている）
026	ラフ	どこか自嘲気味な笑みを浮かべながら、ルディア様はそう言った。 そして儂に背を向ける。 彼女の髪を飾るバレッタが、太陽の光を浴びてきらりと光った。 それは白百合をモチーフにしたものらしく、彼女の黒い髪によく映えていた。	語り
027	アンネローゼ	あら、素敵な薔薇！	突然聴こえてくる声。うっとりとして。
028	ラフ	遠くから可憐な声が飛んできた。 ハッとしてルディア様が顔を上げ、その声の主を探すべく辺りを見渡す。 儂も目を凝らし、声の主を探してみた。	語り
029	アンネローゼ	ここ、あなたのお家？	
030	ラフ	門扉のところに、一人の少女が立っているのを見つけた。 プラチナの髪にブルーの瞳をした、一瞬にして目を奪われるほどの美貌の娘だった。 幼く愛らしいが、どこか上品さも漂う……彼女ももしやどこかの王女なのではないかと、儂は一瞬考えたほどだ。	語り
031	ヴェルディアナ	誰かしら、あの子……	訝しげに

番号	キャラ名	台詞	ト書き
032	ラフ	ルディア様、私があの子に話を聞いてきましょう	
033	ヴェルディアナ	いえ、私が行きます。	歩いていく……
034	アンネローゼ	あら、あなた…とてもきれいな人ね	
035	ヴェルディアナ	それはどうも。あなたもとても可愛らしい方ね。 ……あなた、どなた？ このあたりに住んでいらっしゃるの？	
036	アンネローゼ	ええ。 ここから少し離れているけれど、真っ赤な煉瓦のお家に住んでいるわ。	
037	ラフ	真っ赤な煉瓦の家（いえ）。 ……そういえば、見覚えがある。食料などを調達しに街へ行く途中に必ず目に入る、この庭に咲く薔薇のように赤い色をした煉瓦造りの屋敷。 そこはいつもカーテンが閉まっていて、中で誰か生活しているのか、そもそも誰かの自宅なのかすらもよく分からない場所だった。	語り
038	ヴェルディアナ	そうなの 私、最近ここに来たばかりだからそのお家のことは知らないけれど…… あなた、お名前は？	
039	アンネローゼ	アンネローゼ	
040	ラフ	……アンネローゼ？ 儂はふと、その名前に引っかかりを感じた。 どこかで聞いた覚えのある名だった。 いや、しかし、決して珍しい類の名ではない。 平凡と言えば平凡な名だ。 けれど、なぜか……急に、妙な胸騒ぎがしてきた。	語り
041	ヴェルディアナ	アンネローゼ。 あなたに似合う、素敵なお名前ね	
042	アンネローゼ	ふふふ、ありがとう！ 私も気に入っているの。 ねえ、あなたのお名前は？	
043	ヴェルディアナ	ああ、ごめんなさい、名乗り忘れていたわ。 …私は、……ルディア。 ルディアよ。	少し迷ってから
044	アンネローゼ	ルディア！ あなたのお名前も素敵！ ……ねえルディア、私と遊んでくださらない？ 今私、とっても退屈で、そしてお家に帰りたくないの。	後半、少し拗ね気味に
045	ヴェルディアナ	あら、そうなの。 いいわ、私も……あなたと同じようなものだし 遊びましょう	門を開けてあげる
046	アンネローゼ	まあ嬉しい！ ありがとう！	中に入る
047	ラフ	ルディア様はあっさりと門扉を開け、そのアンネローゼという名の少女を別荘へと招き入れてしまった。	語り
048	ラフ	ルディア様、その方は……	歩いてくる二人の少女に向かって
049	ヴェルディアナ	アンネローゼと言うのですって。このあたりに住んでいるらしいわ。 彼女と遊ぶことにしたの。	
050	アンネローゼ	ごきげんよう、えーと……	ラフの名前が分からない

番号	キャラ名	台詞	ト書き
051	ヴェルディアナ	彼はラフよ、アンネローゼ。 この庭師。	
052	アンネローゼ	庭師！ まあ、ということは、この薔薇はあなたが？	
053	ラフ	はあ……そうですが……	
054	アンネローゼ	素敵！ こんなにきれいに咲き誇ったたくさんの薔薇、久しぶりに見たわ……	うっとり
055	ラフ	久しぶり？ 以前も彼女は、こんな風に咲く薔薇を見たことがあるのだろうか。 ルディア様はアンネローゼのその言葉には別段興味を示さず、さあ、と言ってアンネローゼの手を取ると、	語り
056	ヴェルディアナ	お家の中に入りましょう、アンネローゼ。 美味しいお茶をご用意してあげる。 多分、メイドが甘いケーキを焼いているはずだし……	二人、話しながら屋敷の中へ入って行く
057	アンネローゼ	あら素敵！ お茶は薔薇のお紅茶かしら？	
058	ヴェルディアナ	薔薇の紅茶？ そんなものがあるの……？	
059	アンネローゼ	あら、知らないの？ とっても美味しいのよ……	
060	ラフ	屋敷に入って行く二人の背中を見送りながら、儂は……ひどくざわつく胸を、抑えた。	語り

## Scene4

オルトヴィーンはリビングで一人過ごしていた。暖炉で火がパチパチと爆ぜる音がある。  
そこにアンネローゼが帰ってくる。

061	オルトヴィーン	……おや、アンネ ずいぶんと機嫌が良さそうだね	帰ってきたアンネローゼに向かって
062	アンネローゼ	ええ！ 兄さまがお相手してくれないから、お友達を作って来たわ	
063	オルトヴィーン	へえ、それは良い事だね。 ……で、その子は君の『お気に入り』かい？	
064	アンネローゼ	さあ、どうかしら？ 兄さまには教えてあげない	まだ少し拗ねている、去っていく
065	オルトヴィーン	……やれやれ、まだ機嫌は直っていないようだ。 ……ん？	外で雨が降り始めたことに気づく
066	オルトヴィーン	雨か……これじゃあますます、彼の目覚めが遅くなってしまいかもしれないな……困ったものだ	

アンネローゼ、自室に戻る。

067	アンネローゼ	……あめ？ ……雨は、嫌……	段々力が抜けていき、ベッドに倒れ込む
-----	--------	----------------	--------------------

番号	キャラ名	台詞	ト書き
068	アンネローゼ	雨の音……きらい…… ああ……なんだかひどく、眠たくなって、きちゃった……	段々意識を失っていく

## Scene5

069	ラフ	今日は朝からずっと雨が降っていた。 しかしそんな雨の中、ルディア様は門扉の前で、傘も差さずにずっとあの少女、アンネローゼのことを待っていた。	語り
070	ラフ	ルディア様、風邪を召してしまいます。 どうかお部屋にお戻りください	傘を差し出しながら
071	ヴェルディアナ	でもアンネローゼが来るかもしれないわ	
072	ラフ	アンネローゼさまが来られたら、私が必ずルディア様をお呼びします。ですからどうか、お部屋にお戻りください。	
073	ヴェルディアナ	……。 絶対よ？	渋々頷き、屋敷に戻っていく
074	ラフ	そう言って、ルディア様は渋々といった調子で屋敷の方へと戻っていった。 まったく、アンネローゼという少女……ルディア様をあそこまで魅了するとは、一体何者なのか。 ……どうしても、あの少女に対する違和感が拭えない。何故なのだろう。 どこかで聞いた覚えのある名。プラチナの髪に、ブルーの瞳……見た物を虜にせずにはいられないその美貌…… 何故こんなにも胸がざわつくのか。 ……もしあの少女が今日ここを訪れても、ルディア様にはお伝えしないでおこうと、僕はこっそり心に決めた。	語り

やがて夜が訪れる

075	ラフ	……しかし、あの少女は結局屋敷を訪れなかった。 終日雨なせいもあるだろう。 ルディア様はひどく落胆され、早々に部屋で休まれることにしたそうだ。 これでいい。 僕は安堵する。 このままあのアンネローゼという少女が訪れなければ、きっとこの胸のざわつきも収まるはずだ。 そうなれば何の心配もなく、ルディア様の「療養」を見守れるというもの。 ……そうであれ、と願う一方で、あの少女は必ずまた訪れる、という確信に近い感情が、心の内で蠢くのを感じていた。	語り
-----	----	--	----

## Scene6

076	オルトヴィーン	アンネ、アンネ……	眠るアンネローゼを優しく揺り起こす
077	アンネローゼ	んん……	ゆっくりと目覚める
078	オルトヴィーン	起きられるかい？	
079	アンネローゼ	にい、さま……？	どこかぼんやりと気だるげに
080	オルトヴィーン	顔色が悪いね 薔薇の紅茶を淹れたよ、お飲み	カップを差し出す
081	アンネローゼ	ええ、そうね……	カップを受け取る

番号	キャラ名	台詞	ト書き
082	アンネローゼ	雨…まだ止まないの……	気だるげに
083	オルトヴィーン	うん。でももうじき止むよ。 明日にはね、きっと	
084	アンネローゼ	それならいいわ……今日は遊びにいけなくて残念だった……	気だるげに
085	オルトヴィーン	仕方がないよ 君は雨に弱いんだ。 ……僕の所為で	最後、少し申し訳なさそうに、悔しそうに
086	アンネローゼ	兄さまの所為ではないわ…… ん…（紅茶を飲む） ……ふう……お紅茶を飲むと少しだけ落ち着く…やっぱり薔薇のお紅茶が一番ね……	
087	オルトヴィーン	そうか それは良かった	少し安堵して
088	アンネローゼ	ええ……	アンネローゼの頭を撫でる
089	オルトヴィーン	さあ、紅茶を飲んだらゆっくりとお休み。	
090	アンネローゼ	そうするわ……でも、兄さま……おねがい……私が眠るまで傍にいて……私が眠ったら、あの子のところへ戻って構わないから……	横になりながら
091	オルトヴィーン	ああ、分かったよ、アンネ。 では、こうやって手を繋いでいてあげようね	アンネローゼの手を握る
092	アンネローゼ	……ふふ、不思議 冷たいのに、あったかい……	
093	オルトヴィーン	そうだね、アンネ	段々眠りに落ちていく
094	アンネローゼ	……にいさま……おねがいよ……もしあの子が目覚めても……アンネを、……ひとりに、しな、い、で……（寝息）	
095	オルトヴィーン	……。 ……当たり前だろう、僕のアンネ。僕の愛する一輪の薔薇。 僕は君のために、生きているのだから——……	

## Scene7

096	ラフ	今朝は昨日の雨が嘘のように晴れていた。雨露にまだ濡れている薔薇たちは美しく咲き誇り、太陽光を浴びて煌めいている。 そんな中で、やはりいつものように凜としたいでたちで、ルディア様は門扉の前でじっとアンネローゼを待っていた。	語り
097	ラフ	ルディア様、別に門の前で待たなくてもよいのでは…	心が急いている
098	ヴェルディアナ	アンネローゼとすぐにでも会いたいのよ 私のやることに口出ししないで頂戴	
099	ラフ	はあ……	語り
100	ラフ	本当に、あの少女の何がルディア様をここまで惹きつけるのであろうか。確かに可憐で美しい少女であった。しかし、それ以外は分からない。 儂が見られない、屋敷の中で何かあったのかもしれない。儂は屋敷の中に入ることは基本許されない。所詮はただの庭師だからだ。 だから二人の間で何が交わされているのかを知る術はない……	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
101	アンネローゼ	ルディアー！	駆け寄ってくる
102	ヴェルディアナ	！ アンネローゼ！	喜び
103	アンネローゼ	昨日は来られなくてごめんなさいね、雨だったから……	門のところまでやって来て
104	ヴェルディアナ	ああ、良いのよ、気にしないで！ 今日来てくれたのだもの！ それで十分！	心から嬉しい 門を開ける
105	ラフ	ルディア様は頬をバラ色に染め、すぐに門扉を開け、アンネローゼを屋敷に招き入れた。 アンネローゼは、今日はプラチナの髪をみつあみにして、レースの襟がついたワインレッドのワンピースを着ていた。 この庭に咲くどの薔薇よりも美しく咲き誇る、愛らしい容姿。 きっと男なら、たとえ儂のような老齡であろうと簡単に心を奪われてしまうであろう。 しかし儂は、どうしても彼女への違和感を拭えないままなのである……	語り
106	アンネローゼ	ねえ、今日はこのお庭を見せてほしいわ この綺麗な薔薇たちを	
107	ヴェルディアナ	ええ、もちろん 構わないわよね、ラフ？	
108	ラフ	はあ、それはもちろん、構いませんが……	
109	アンネローゼ	ふふふ、ありがとう！	
110	ヴェルディアナ	さあ、アンネローゼ…… ではゆっくりと、薔薇たちを見ましょう	アンネローゼの手を取り、歩き出す
111	ラフ	二人の少女は、手を取り合って庭を歩き始めた。 儂は気づかれぬように距離をとりながら、二人の後をそっと追うことにした。 ……できるだけ、ルディア様とアンネローゼを二人きりにしたくなかったのだ。	語り
112	アンネローゼ	ああ、本当に見事な薔薇たち。今日は雨露に濡れていっそう綺麗ね	二人、歩きながら話す
113	ヴェルディアナ	本当に。	
114	アンネローゼ	ねえ、どうしてこのお家はこんなに薔薇を咲かせているの？	
115	ヴェルディアナ	さあ……お父様とお母様のご趣味じゃないかしら。私にはよく分からないの。	
116	アンネローゼ	そうなの。ねえ、あなたのお父様とお母様ってどんな方？	
117	ヴェルディアナ	どんな……そうね、お父様はとても厳格で、頭でっかち。でも、兵士…部下たちには慕われているわ。 お母様は、そんなお父様の隣でいつも穏やかに微笑んでいるような人。でも、私が甘えてもそんなに優しくしてくれるわけでもない……	少し寂しそうに
118	アンネローゼ	ふうん…… ルディアは、お父様とお母様が好き？	



番号	キャラ名	台詞	ト書き
119	ヴェルディアナ	それは……どうかしら よく分からないわ 嫌いではないことは確か。でも、好きかと言われると……。……。 ……ア、アンネローゼはどうなの？ お父様とお母様のことはお好き？ どんな方たち？	答えに困り、話題を変える
120	アンネローゼ	さあ？ どんなだったかしら？ もうお父様もお母様もいないから分からないわ	平然と答える
121	ヴェルディアナ	あ……ご、ごめんなさい、私ったら、	
122	アンネローゼ	良いのよ。 別にいなくても平気なもの。だって、私には兄さまがいるから。	幸せそうにうっとり
123	ラフ	兄さま。 彼女には、「兄」がいる？ ……アンネローゼ。 プラチナの髪にブルーの瞳。 薔薇のように可憐な美貌。 そして、兄。 覚えがあった。 間違いなく、覚えがあった。 それだけは確信した。 ……儂の中で、何かが少しずつ繋がりはじめていく。だが、なかなか答えにたどり着けない。 儂は間違いなく、このアンネローゼという少女の事を知っている。でも一体どこで知ったのだったか……	語り
124	ヴェルディアナ	まあ、お兄様がいるの。 それは素敵ね、どんな方？	
125	アンネローゼ	そうね……とても優しいわ！ でも最近はあまり構ってくださらないの……兄さまは『お気に入り』の子ができると、私のことなんてすぐほったらかしにして、その子の事ばかり考えるようになってっちゃうのよ	まだ少し拗ねている
126	ヴェルディアナ	そうなの、ふふふ あなたのお兄様、もしかして結構浮気な方なのかしら。	
127	アンネローゼ	そうね、そうなのかも！ きっと今の『お気に入り』も苦労するわ。 兄さまはすぐに気に入っちゃうの、可哀想な子は、特に。	
128	ヴェルディアナ	優しいのか優しくないのか、よく分からない人なのね	
129	アンネローゼ	ええ！ でも……でも昨日は、手を繋いで私が眠るまで傍にいてくれたから、それで全部許してあげたのよ。	
130	ヴェルディアナ	あら、素敵。……手を繋いで一緒に眠ってくれる人がいるなんて、羨ましいわ……	寂しげに
131	アンネローゼ	あなたにはいないの、ルディア？	
132	ヴェルディアナ	そうね……幼い頃からずっと、私は一人で眠っていたわ…… 眠るまでは乳母があやしてくれたけど、眠る時はいつだって一人だった……	寂しげに
133	アンネローゼ	……あなたはずっと、孤独だったの？	
134	ヴェルディアナ	そう……ということになるのかもしれないわね	寂しげに
135	ラフ	ルディア様。 ヴェルディアナ王女様。 第一王女として厳しく躰けられ、きっとこんな風に友人と親しく会話することも許されたことがなかったのだろう。 だから、アンネローゼに執着するのだろうか？ はじめてできた、「友」だから……	語り
136	アンネローゼ	でもこれからは、孤独ではないのではなくって？	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
137	ヴェルディアナ	え？	
138	アンネローゼ	だって、私がいるじゃない	
139	ヴェルディアナ	……アンネローゼ	少し驚く、嬉しい
140	アンネローゼ	ふふふ、前から気になっていたのだけど、「アンネ」で良いわ。	
141	ヴェルディアナ	……アンネ、……ありがとう。	心から嬉しくて微笑む
142	ラフ	ルディア様が微笑んだ。 今まで見たことがないほど穏やかで優しい微笑みだった。 アンネローゼという少女への違和感は決して簡単に拭いきれるものではない。 けれど彼女をこんなにも幸せそうな顔にしてくれるというのであれば、……目を逸らしてもいいのかもしれない。 少しだけ、そう思った……	語り

## Scene8

オルトヴィーンはいつものように暖炉の火が爆ぜる音を聞きながら紅茶を楽しんでいる  
そこにアンネローゼが帰ってくる

143	アンネローゼ	ただいま、兄さま	歩み寄ってくる
144	オルトヴィーン	やあ、お帰り ああ、良かった。顔色もちやんと良くなっているね	安心して
145	アンネローゼ	ええ もう平気。 昨日飲んだお紅茶と、それから、綺麗な薔薇をたくさん見たからね	機嫌が良い
146	オルトヴィーン	へえ、綺麗な薔薇を？	
147	アンネローゼ	そう。 とっても綺麗な薔薇がたくさん咲いたお屋敷があるの。 そこに、ひとりぼっちの女の子がいたのよ。 だから私、お友達になったの。	
148	オルトヴィーン	なるほど。 それが君の『お気に入り』か	
149	アンネローゼ	ふふふ、そうね そういうこと	
150	オルトヴィーン	やっと教えてくれたね、アンネ	
151	アンネローゼ	……あら、やだ。兄さまには教えないって決めてたんだっただわ。 でも、もういいわ。昨日は眠るまで傍にいてくれたし…許してあげる	
152	オルトヴィーン	それは良かったよ	可笑しそうに
153	アンネローゼ	……あの子は、目覚めた？	オルトヴィーンの隣に腰掛ける

番号	キャラ名	台詞	ト書き
154	オルトヴィーン	いや、まだ…… でも、この間少しだけ動いたんだ。 本当に微かだけど、ぴくりと指が、確かに。 だからいずれは……	嬉しい
155	アンネローゼ	そう。 でもまだ少し、時間はかかるわね？	
156	オルトヴィーン	まあ、そうだね	
157	アンネローゼ	ふふふ、それは良かった。 私の方も、まだもう少しだけ時間がかかりそうだから	
158	オルトヴィーン	アンネ。 君は『お気に入り』ができると見境がなくなる。僕はとても心配だよ。 あまり大きな問題は起こさないでおくれよ。 彼が目覚めるまでは、ここを離れるわけにはいかないんだからね。	論すように
159	アンネローゼ	分かっているわ。 大丈夫、今回は慎重にやつるもりよ。……なんとなく、私の事に気づいていそうな人がいるの。	(ラフのこと)
160	オルトヴィーン	それは……危険じゃないか。 もうそこに行くのはおやめ	
161	アンネローゼ	それはいや。 あの子、ひとりぼっちで可哀想なのなもの。	
162	オルトヴィーン	アンネ	
163	アンネローゼ	第一、見境がなくなるのは兄さまだって同じ。 だから兄さまには言われたくないわ。 私だって、兄さまと同じように『お気に入り』を仲間にしたいのよ……	立ち上がり、去っていく また少し拗ねてしまう
164	オルトヴィーン	……やれやれ。また機嫌を損ねたかな……まったく、姫さまの扱いは難しいよ、本当に。	苦笑しつつ カップをテーブルに置く

## Scene9

165	ラフ	あった、これだ…… 『これから書き記しますのは、私（わたくし）が見たとある恋物語の顛末でございます。』……先祖代々伝わる日記……	ラフ、ノートを取り出し、捲る 『』＝ノートに書かれた内容
166	ラフ	その日の夜、儂はふと思い出して部屋を掻きまわし、そうしてようやく見つけた。 古ぼけた日記帳。恐らく、百年は前のもの。 その割に保存状態が良いのは、この日記は必ず受け継ぐようにとの先祖代々の言い伝えのおかげだ。 何故こんなものを受け継がなくてはいけないのか、甚だ疑問であったが……もしかしたら、	語り
167	ラフ	アンネローゼ……『プラチナの髪とブルーの瞳をした、あまりにも美しい少女でした。一瞬の稲光で見ただけでも忘れられないほどの美貌。』 『私は彼女に「兄さま」と呼ばれた美少年にそっと会釈をします』…… 間違いない、あの少女のことだ……つまりあの少女は、百年に近い時を、生きている？ それともやはり偶然か？ いやしかし……	日記を読み進める
168	ラフ	これほどまでに類似することなどあるだろうか？ 名前だけならば偶然と言いきれたかもしれない。 しかし、髪の色、瞳の色、驚くほどの美貌。そして兄の存在。 それらすべてが結びつくことなんて、「同一人物である」ということ以外にあり得るだろうか？	語り
169	ラフ	一体あの少女は何者なんだ……この日記をしっかりと読んでいけば、分かるだろうか……	
170	ラフ	しかし。 儂はページを捲る手を止める。 折角ルディア様があんなに幸せそうに日々を過ごしているのに、それを邪魔することになるのではないだろうか。 それは果たして、正しい行いなのだろうか？ 儂の中で、二つの感情が激しく葛藤していた……	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
<b>Scene10</b>			
翌日。 よく晴れた美しい日。 今日も二人の少女は薔薇園で戯れている。			
171	アンネローゼ	ルディアのバレッタ、素敵ね。 白百合がきらきらして綺麗。	バレッタを褒められて嬉しい
172	ヴェルディアナ	あら、ありがとう……私もお気に入りなの、これ	
173	アンネローゼ	あなたは白百合が好きなの？	
174	ヴェルディアナ	うーん、そうね……別段そういうわけではないけれど……でもこれは、デザインがすごく気に入っているの。	
175	アンネローゼ	どなたかからの贈り物？	
176	ヴェルディアナ	ううん、これは……これは初めて、こっそりおし……家（いえ）を抜け出して、街に出た時に自分で買ったものなの	お城、と言いかけて言い換える
177	アンネローゼ	へえ、素敵！ 戦利品ってやつね！	
178	ヴェルディアナ	そ、それは少し違う気がするけれど……でもまあ、ある意味そうかも。 自分でもよく無事に抜け出して、誰にも気づかれずに戻ってこられたと思うわ。……まあ、本当は気づかれていたのかもしれないけれど……	
179	アンネローゼ	ねえ、触れてみてもいい？	手を伸ばす
180	ヴェルディアナ	え？ ええ、もちろん……	
アンネローゼ、ヴェルディアナのほうに手を伸ばし……			
181	ヴェルディアナ	え？ アンネ……	自分の頬に触れてきたアンネローゼに驚く
182	アンネローゼ	ルディアってとても綺麗な肌をしているわね……こんなに清らかな肌をしているひと、なかなかいないわ……	ヴェルディアナの頬を撫でながら
183	ヴェルディアナ	ア、アンネ、触れるのはバレッタでは、	慌てつつ、少し照れている
184	アンネローゼ	バレッタにも触れたいけど、あなたにも触れたかったの、駄目？	
185	ヴェルディアナ	え、ア、アンネ……あ、	
二人の少女の影が重なる……			
186	ラフ	……日が経つにつれて。 アンネローゼという少女は、妙にルディア様にスキンシップをはかるようになっていったように思う。 今日も、二人の少女の影は重なり合う。 咲き誇る薔薇の奥深くで行われる、少女たちの密事（みつじ）。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
187	ヴェルディアナ	……アンネ……	微かにときめきつつ動揺
188	アンネローゼ	ふふふ、好きよ、ルディア。 あなたのその白い清らかな肌も、綺麗な黒髪も、白百合のバレッタも、全部	妖艶に
189	ヴェルディアナ	わ、…私も、アンネのことは好きよ、で、でも、そんな……あの……	ドキドキしている
190	アンネローゼ	ごめんなさい、私ったら急ぎ過ぎたかしら	
191	ヴェルディアナ	い、急ぎ過ぎたって、そんな、その……	動揺
192	アンネローゼ	嫌だった？	
193	ヴェルディアナ	い、嫌なんかじゃ……なかった、……と、思う、わ……	
194	アンネローゼ	ふふふ、なら良かった。	
195	ラフ	アンネローゼはころころと悪戯っぽく笑う。 それはルディア様をからかっているのか、何なのか……見ているだけの儂にはなんとも判断のしようがないことだった。	語り
196	アンネローゼ	ねえ、ルディア……あなた、ずっとひとりぼっちだったって言ってたわよね	
197	ヴェルディアナ	え、ええ……まあ、そうね……	
198	アンネローゼ	それってとっても、寂しいことじゃなあい？	
199	ヴェルディアナ	それは、……もちろん、そうよ。 とても寂しいわ……	
200	アンネローゼ	だったら……	立ち上がる 風が吹く……
201	ラフ	アンネローゼは立ち上がった。 プラチナの髪が風に揺られ、彼女の表情を隠してしまう。	語り
202	アンネローゼ	私と一緒に、時を超えた先に、いかない？	

## Scene11

アンネローゼが帰っていった夕暮れ。ぼんやりと佇むヴェルディアナに近づくラフ

203	ラフ	ルディア様、ルディア様……	
204	ヴェルディアナ	なに、ラフ……	ぼんやりとして
205	ラフ	もう、アンネローゼ様とお会いするのはおやめください	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
206	ヴェルディアナ	あなたにそんなことを言う権利はないわ アンネは私のお友達。それなのにどうして会ってはいけないなんて言うの？	
207	ラフ	彼女は危険です。 魔性なのです。 近づいては、あなたの身に、	
208	ヴェルディアナ	危険？ あの子のどこが危険だっていうの？	少し不愉快そうに
アンネローゼ「私と一緒に、時を超えた先に、行かない？」			
209	ラフ	その言葉が「宣告」であることを、僕は知っていた。 あの日の晩、結局僕は日記のすべてを読んだ。そこにも確かに、その言葉が、……完全に同じではなかったが、出てきたのだ。	語り
210	ラフ	彼女は「ヴァンピーア」です、ルディア様	
211	ヴェルディアナ	ヴァンピーア？ あなた、何ふざけたことを言っているの。 彼女は普通の女の子。それに、ヴァンピーアが日光の下に現れることができると思って？	
212	ラフ	しかし	
213	ヴェルディアナ	ラフ、あなた働きすぎて疲れているんじゃない？ 休暇をあげるわ、どこかにバカンスにでも行ってらっしゃいな	
214	ラフ	ルディア様、	
215	ヴェルディアナ	お願い アンネのことだけは口出ししないで！	必死に
216	ラフ	……！	驚く
217	ヴェルディアナ	私は今までいろいろなことを制限されてきたの！ お友達くらい自由に選ばせて……お願いよ……	
218	ラフ	ルディア様……	哀れみ
219	ヴェルディアナ	仮にあの子が本当に魔性だったとしても別に構わない……私はアンネを信じる……私のはじめてのお友達を、信じるの……	切実
220	ラフ	嗚呼、ルディア様。 なんと憐れなヴェルディアナ王女様。彼女にとっては、アンネローゼが何であろうと関係ないのだ。 「自分の友である」 それだけで、構わないのだ。それならば……	語り
221	ラフ	……承知しました。ヴェルディアナ王女	
222	ヴェルディアナ	その呼び方はやめなさい！	
223	ラフ	いいえ、やめません。ヴェルディアナ王女。 あなたのご命令のままに。 もう、何も言いません。	ヴェルディアナに背を向け、歩き出す
224	ラフ	それならば、僕がこの手で。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
<b>Scene12</b>			
オルトヴィーンはベッドで眠る人物を覗き込み、語り掛けている			
225	オルトヴィーン	僕の声が聴こえる？ 僕の愛しい薔薇の花……ずいぶん時間がかかったけれど、もうじき、もうじきだね……待っているよ、君が目覚めるまで……ちゃんと待っているから、だから早く、目覚めておくれ……	ベッドに眠る人物がもぞもぞと動く
226	アンネローゼ	兄さま	ノックの音、扉を開けて入ってくるアンネローゼ
227	オルトヴィーン	アンネ	
228	アンネローゼ	……あら、ごめんなさい。 お邪魔したかしら？	少しからかい気味に
229	オルトヴィーン	まったく、君は…… どうしたんだい、何かあった？	
230	アンネローゼ	ううん、ただ、彼はどうしているかしらと思って	歩み寄る
231	オルトヴィーン	もうじき目覚めそうだよ。 ほらご覧、顔色がだいぶ良くなってきている。それに呼びかけると時折体を揺らすようになったんだ。	嬉しい
232	アンネローゼ	そう、良かった。 私の方も、もうじき終わりそうなの。	
233	オルトヴィーン	そうか。 それはちょうど良かったね。	
234	アンネローゼ	ええ。 ……ねえ、兄さま	オルトヴィーンに抱き付く
235	オルトヴィーン	なに？	
236	アンネローゼ	キスをして	
237	オルトヴィーン	どうしたんだい、急に？	
238	アンネローゼ	兄さまのキスがほしいの。 はやく、	
239	オルトヴィーン	はいはい、分かったよ、僕のお姫さま。	アンネローゼに口付ける
240	アンネローゼ	……ふふ、ありがとう。 それじゃあ……行ってくるわね	オルトヴィーンから離れる
241	オルトヴィーン	今夜行くのかい？	
242	アンネローゼ	ええ。 きっとそれが一番だと思うの。 あまり時間を置きすぎると危ない気がするから。	
243	オルトヴィーン	……こういう時の君の勘は良く当たるからね。 君の好きにするといいよ、アンネ	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
244	アンネローゼ	ありがとう	部屋を去っていくアンネローゼ
245	オルトヴィーン	……聞いたかい？ アンネが『お気に入り』に会いに行くんだって。 うまくいくといいね。でも、……彼女の薔薇は枯れやすい……そこだけが、心配だね……	少し不安を抱いている

## Scene13

突然、雷が鳴り始める夜。 ヴェルディアナはカーテンを閉めようと立ち上がる……

246	ヴェルディアナ	ひどい雷ね……	
247	アンネローゼ	ルディア	
248	ヴェルディアナ	！ ア、アンネ……？ 一体いつからそこに……	驚いて立ち止まる
249	アンネローゼ	うふふふ！ さあ、いつからかしら？	歩み寄ってくる
250	アンネローゼ	ねえ、あなた、『私と一緒に、時を超えた先に、行かない』？	
251	ヴェルディアナ	…それ、昼間にも聞かれたわ……一体どういう意味なの？	
252	アンネローゼ	そのままの意味よ。 時が追いつくことのできない場所へ行くの。 私と、あなた、二人で。	
253	ヴェルディアナ	あなたと二人で……	心惹かれる
254	アンネローゼ	そう。 私たちは永遠に一緒。 ひとりぼっちは寂しいもの。 だから一緒に、ね？	手を差し出す
255	ヴェルディアナ	アンネ……	手を伸ばしかける
256	ラフ	ヴェルディアナ様！！！！	部屋に飛び込んでくるラフ
257	ヴェルディアナ	ラ、ラフ！	驚き
258	アンネローゼ	ラフ……	やっぱり来た、と思う
259	ラフ	姫さまから離れる、この魔性……ヴァンピーア！	ゆっくりと歩み寄ってくる
260	アンネローゼ	……やっぱり、あなた、気づいていらしたのね	愉しそうに
261	ラフ	僕の先祖が、お前と会っていた……お前はもう覚えておらんかもしれないが……	
262	アンネローゼ	先祖？ お名前は？	



番号	キャラ名	台詞	ト書き
263	ラフ	ベラ	
264	アンネローゼ	ベラ…… ああ、覚えているわ！ あの可愛らしいお世話係！ 素敵、あなた彼女の子孫だったの	愉しそうに
265	ラフ	お前を初めて見た時から、ずっと違和感を覚えていた…アンネローゼという名、その容姿…… そして『時を超えた先に行く』という言葉……全て、先祖の日記に書かれていたことだ……お前は、ヴェルディアナ様をどうするつもりだ？	
266	アンネローゼ	どうって……分かっているのではなくて？	楽しい
267	ラフ	……なら、	銃を構える
268	ヴェルディアナ	！ ラ、ラフ…！ あなたアンネに何をするつもり！？	驚愕、焦り
269	ラフ	ヴェルディアナ様、下がっててください！ あの娘を生かしておいてはいけない……！	引き金に指をかける
270	ヴェルディアナ	やめて！！	駆け出す
銃声が鳴り響く…！			
271	ラフ	！！！！	驚愕
272	ヴェルディアナ	あ……	弾丸が胸を貫いた
273	アンネローゼ	あら	
ヴェルディアナ、その場に倒れ込む			
274	ヴェルディアナ	あ……ああ……あ……	痛みで呻く
275	ラフ	ヴェ、……ヴェルディア、ナ、さま……ヴェルディアナさま！ ヴェルディアナさま！！！！！！	倒れたヴェルディアナに駆け寄る
276	アンネローゼ	なんだか、意外な展開。	
277	ラフ	申し訳ございません、申し訳ございません、ああああ、あああああああああああああ！	半狂乱になる
278	ヴェルディアナ	う……あ……ああ……アン、ネ……	痛みで意識が薄れていく
279	アンネローゼ	なあに、ルディア？	
280	ヴェルディアナ	こ、れ……	
ヴェルディアナ、髪からバレッタを取り外し、アンネローゼに差し出す			

番号	キャラ名	台詞	ト書き
281	アンネローゼ	あなたのバレッタ。 なあに、くださるの？	半狂乱で叫ぶ（20~30秒）
282	ヴェルディアナ	え、え……わた、しは……あなたと……時を超えた、先、に……いけそうに、ない、から……それ、だけ、でも……	
283	ラフ	ああああ、ああああああ、あああああああああああああああ！	
284	ヴェルディアナ	おねがい……つれて、いって……あなた、と、……いっしょ、に……	
285	アンネローゼ	分かったわ。連れて行ってあげる。	

アンネローゼ、ヴェルディアナからバレッタを受け取る。 ヴェルディアナ、微笑んで絶命。

286	アンネローゼ	それにしても…… 流石に少し、騒がしいわ	冷酷に
-----	--------	-------------------------	-----

アンネローゼ、半狂乱のラフに近づき、そっと彼の首筋に手を触れる

287	ラフ	ああああ、あああ、あ……？ う、あ…… あ……ああ……	段々と力が抜けていき、やがて倒れる
-----	----	-----------------------------	-------------------

288	アンネローゼ	残念。 私も兄さまみたいに、『お気に入り』を仲間にできると思ったのに。	雷が落ちる……
-----	--------	-------------------------------------	---------

## Scene14

289	オルトヴィーン	お帰り、アンネ…… ! その血は?!	血にまみれたアンネに驚く
-----	---------	--------------------	--------------

290	アンネローゼ	大丈夫よ、私の血じゃない。	オルトヴィーンに歩み寄りながら
-----	--------	---------------	-----------------

291	オルトヴィーン	……一体何があったんだい？	冷静に
-----	---------	---------------	-----

292	アンネローゼ	少しね、可哀想なことが起きちゃったの。 でも仕方ないわ。あの子は時の先にはいけなかった……
-----	--------	---

293	オルトヴィーン	失敗した、というのとも少し違うみたいだね？
-----	---------	-----------------------

294	アンネローゼ	ええ。 ところで、あの子は目覚めた？	冷静に
-----	--------	--------------------	-----

295	オルトヴィーン	え？ あ、ああ……丁度ね。 君が帰ってくる少し前に……まだぼんやりとしているからすぐには動けないけれど
-----	---------	---

296	アンネローゼ	それは都合がいいわ。 じゃあ、彼が動けるようになるまでの間に、ことの顛末を教えて差し上げる。 ねえ、見て、このバレッタ。 とっても綺麗じゃない？ 白百合のバレッタ。私と一緒に時を超えてくれる、私の『お気に入り』よ。	オルトヴィーンにバレッタを見せ、語り出すアンネローゼ……
-----	--------	--	------------------------------

**END**